

〔国際会議報告〕

第9回アジア流体力学会出席報告

*北大・院・工 石 川 仁†

アジア流体力学会は、1980年インド・バンガローにて第1回が開催されて以来、ほぼ3年毎に中国、日本、香港、韓国、シンガポールなど、おもに東・東南アジア、インド地区にて開催されてまいりました。第9回目となる本年度は、5月27日から31日まで、中東地区のイラン・イスファハンでの開催となりました。

学会が行われたイスファハンは、イラン中央部に位置する16世紀ペルシアの古都です。ガイドブックに「イランの京都」とも謳われる理由は、ユネスコの世界遺産でもあるエマーム広場をはじめとする、荘厳かつ華麗な歴史的建造物にあります。16、17世紀には

「イスファハンは世界の半分」

とその繁栄を讃えられるほど、多くの隊商や使節が世界各地からイスファハンを訪れたそうです。

その往時を彷彿させるがごとく、本会にも世界13カ国から252人の参加、177件の発表がありました。昨年の9・11テロの影響か、数件のキャンセルもありましたが、イランの外気温を超えるほどの熱気にあふれた学会となりました。

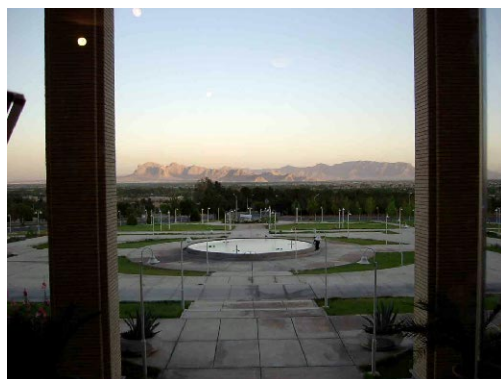
学会には39のGeneral Sessionがあり、流れの不安定性や遷移、乱流モデルやマイクロマシンなど、多岐にわたる分野について意欲的な発表と活発な討論が行われました。また5件のPlenary Lectureがあり、Prof. H.G.Hornung (Caltech)が迫力のあるお話ぶりで高エンタルピー流れにおけるRelaxation processについて、Prof. P.F.Linden (Univ.of Cambridge)がイラン独特の建造物である“風塔”を紹介しながら建物の流体振動のお話を、Dr. M.K.Moffat (Univ. of Cambridge)が、特

異点の問題を簡単な例を交えながらわかりやすく解説してくださり、Prof. M.Jamialahmadi (Univ. of Petroleum Industry)が、多孔質内流れの新しい数値計算法について、Prof. M.Sun (Beijing Univ.)が昆虫をモデルとしたマイクロマシンの紹介をしてくださいました。この他に10のSpecial lectureもあり、各ご講演後は会場から数多くの質問、コメントが寄せられました。

イラン国内からも、多数の参加発表がありました。その多くが数値計算であり、とくにAerodynamicsに関するものが多かったようです。その背景には、イランが最近、航空機の自主開発に成功したことなどがあるのかもしれませんが。

さて、ここでイランという国とそこに住む人々の暮らしぶりについて、会期中のわずかな時間ですが私が感じたことをお話をさせていただきたいと思います。

まず、イランまでの交通ですが、日本からはいささか時間がかかります。参加者はそれぞれヨーロッパ・トルコ経由や南回りのシンガポール・ドバイ経由など様々でした。イラン国内への入国はまず首都テヘランへ、そこから空路でイ



キャンパスより市街を望む

* 〒060-8628 札幌市北区北13条西8丁目

† E-mail: ishi@eng.hokudai.ac.jp



会場風景

スファハンに移動します。テヘランへの到着が深夜であったのにも関わらず、学会のスタッフが出迎えにきてくれており、親切にイスファハンまでの乗り継ぎを案内してくれました。

イスファハンは、自分が中東にいることを忘れてしまうほど緑深い美しい街でした。その緑の源は、街を東西に流れるザーヤンデ川にあります。下流で砂漠へと消えるその河畔には、33のアーチをもつペルシア時代の橋や、水タバコの香り漂うチャイハネ（喫茶）が建ち並び、400万市民の憩いの場と心の拠り所になっています。

イスファハン工科大学は、市内中心部から車で30分程の離れた場所にありましたが、会期中はオーガナイザーのご好意により、参加者が宿泊しているホテルまでバスで送迎していただき不便はまったく感じませんでした。

キャンパスの雰囲気は、まず工科大学であるにも関わらず、半数が女子学生であることに驚かされました。イランでは各方面への女性の進出が、日本以上にさかんなようです。しかしその反面、イスラムの戒律により、女性はマントーという黒い頭巾を被らなければならなかったり、バスの座

席が男女別だったりするのは不思議な感じがしました。学会のサポートをしてくれたアルバイト学生のほとんどが英語が達者で、非常にテキパキと仕事をしてくれました。

街中は清潔できれいです。物価が安く、ガソリン7円/L、牛乳15円/L、ホテルで食事しても300円程度で済みました。食事はカバーブなどの肉、米料理が中心で、日本人の口にもよく合います。ただアルコールが御法度なことは、現地のノンアルコールビールに満足できない方々（私を含めて）には少々難点です。我々日本人には砂漠のイメージが強いイランですが、野菜やフルーツもふんだんに採れるようです。イラン国内からのある参加者が、「イランにも日本と同じように四季があり、色々な食材が楽しめる」と話してくれました。

最も印象的なことは、学会に関わったイランの人々が非常に親切だったということです。学会スタッフやイスファハン工科大学のアルバイト学生はいうまでもなく、まったく言葉の通じない送迎バスの運転手さんやキャンパスの食堂の方々まで、すべての人からアジア流体力学学会を成功させようとする真摯な気持ちが伝わってまいりました。厳格な戒律のもとで育まれた、他人への思いやりに溢れたイランという国の素顔に触れることができたように思います。このような素晴らしい経験をさせていただき、また学会の大成功にご尽力くださったイスファハン工科大学の Prof. E. Shirani をはじめ、オーガナイザー・スタッフの方々に深く感謝致します。

最後になりますが、次回のアジア流体力学学会は、2004年5月スリランカのペラデニヤにて開催されます。